

札幌新まちづくり計画市民会議 文化・人づくり分科会第1回会議

会 議 録

平成15年12月4日(木)午後6時30分開会
安田生命ビル 9階 会議室

1 開 会

事務局（企画部長） 定刻になりましたので、分科会を始めさせていただきたいと思
います。本日はお忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。

市役所の職員も多数出席していますが、この分科会に対応して市でもプロジェクトチ
ームを作っています。今後提出させていただく資料の作成やご質問への回答、ご意見の
まとめに従事させていただきますのでよろしくお願いします。

それでは、臼井先生よろしくお願いします。

2 会長挨拶

臼井会長 それでは始めさせていただきます。私は北海道教育大学の臼井と申します。
分科会では、できるだけ元気が出るような、札幌市の将来につながるような明るいビジ
ョンを出しながら、具体的な取り組みについて考えていきたいと思っています。

3 議 事

（ 1 ）分科会の進め方について

臼井会長 これから議事に入りますが、いろいろな立場の方が集まる機会ですし、分科
会のメンバーは固定ではなくて他の分科会の方も自由に参加していいということもあり
ますので、形にこだわらず堅苦しくならないように進めて参りたいと思います。

始めに提案ですが、毎回「 委員」と呼ぶのでは堅苦しいので「さん」付けで呼び
合うようにしたいのですが、いかがでしょうか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

臼井会長 それでは議事に沿って進めてまいります。議事の1番目は分科会の進め方
です。資料1がその進め方です。分科会は4回を予定しており、1、2回目は年内を
めどに行います。1回目が今日で、年の瀬のお忙しい中恐縮ですが、年内にもう一度行
いたいと思います。

今日は委員の方から文書でご意見をいただいているということもありますので、趣旨
をうかがい討論をしながら次回の討論の柱を作っていきます。次回は具体的な検討を
しながら、全体会議に向けて整理をしていくような運びになるかと思
います。

全体の進め方という点ではよろしいでしょうか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

（ 2 ）確認事項（委員提出メモの扱い等）

臼井会長 2つ目に確認事項ですが、この市民会議は原則公開となっており、会議の様
子は議事録の形で市役所のホームページから見るできるようになっています。また、
傍聴も自由にできるようになっています。そのことから、非常に透明性のある会議

だと言えます。そういったことで、委員の方から文書でいただく提言、報告も公開の対象となり得るわけです。その趣旨としては私たちが話している内容をオープンにするということです。

ただ、文書にはお話するためのメモとしてお作りになったというものもあるかと思えます。その時に、メモだけが公表されるとそれだけを読んだ方は理解できなかったり、背景が分からないために誤解が生じてしまう可能性もあり得るわけです。ですから、原則としては公開の対象になりますが、その都度公開するかどうかを確認しながら進めていきたいと思えます。

よろしいでしょうか。事務局から何か補足はないでしょうか。

事務局（企画部調整担当係長） 本日、事前にお三方からメモをいただいております。木路さんの分は、前回不十分なところがあったので差し替えてほしいということです。これについては公開されても良いということですが、他は各委員のご判断におまかせしたいと考えています。いかがでしょうか。

白井会長 各委員からご説明いただく際にもう一度確認させていただきます。

（３）事務局説明（市民アンケート結果の概要、配布資料等）

白井会長 次に市民アンケート結果の概要について、事務局からご説明いただけますでしょうか。

「平成15年度第1回市民アンケート結果」説明

事務局（企画部調整担当係長） それでは簡単に説明させていただきます。

このアンケートは20歳以上の無作為抽出した10,000人が調査対象者です。回収率は42.9%で約4,300人の方からご回答をいただいております。回答者の年代構成比は、50歳代が一番多く23%、その次が60歳代で19.3%、3番目が40歳代で17.8%です。

アンケートには5つの柱がありますが、当分科会に関わる分だけ紹介させていただきます。

6ページですが「芸術・文化、スポーツを発信する街さっぽろ」実現のために特に必要と思うことについて3つまで をつけていただいております。第1位が「芸術・文化を楽しむ環境づくり」、第2位が「芸術・文化活動に参加できる環境づくり」、第3位が「地域でスポーツを楽しむ環境づくり」という順番になっています。年代別では、各年代ともトップは「芸術・文化を楽しむ環境づくり」、第2位の項目は年代によってばらつきがあり、20～30歳代では「芸術・文化活動に参加できる環境づくり」、40～60歳代は「地域でスポーツを楽しむ環境づくり」、70歳以上では「伝統文化・歴史の継承や保存」という結果になっています。

7ページをご覧ください。「ゆたかな心と創造性あふれる人を育む街さっぽろ」でトッ

ブを占めているのは「思いやりとゆたかな心を育む教育」で66.1%です。2位が「社会体験や自然体験の機会の充実」、3位が「非行、いじめ、不登校の問題への対応」です。年代別では、各年代とも1位は「思いやりとゆたかな心を育む教育」、2位は20～60代までの方々は「社会体験や自然体験の機会の充実」、70歳以上の方が「家庭の教育力の向上」を挙げています。

8ページは今後のまちづくりに関する自由記載意見です。一番多かったのは「除排雪の充実、つるつる路面の対策」、第2位が「思いやり、豊かな人間性」です。

アンケート結果については、第1回全体会議でもお配りした資料8、9もご参考にしていただければと思います。

資料2「第4次札幌市長期総合計画の施策の体系」説明

事務局（企画部調整担当係長） 資料2をお開きください。前回の全体会議で大沼さんから、長期総合計画の体系の中で市民会議が議論するのはどの部分になるのか示してほしいとのご要望がありましたので、作成いたしました。

長期総合計画は、市民、地域、環境、経済という4つの体系から成っています。この4つの体系の他に「第5章 魅力と活力を高める都市空間と交通体系の実現」があります。これは都市空間と交通分野に関するものです。あるべき都市像の指針、方向性を示しており、第4章のような施策の体系をイメージする記述ではありませんので、別章に整理されています。

今回の分科会で議論の対象となる部分は「1-1-2 学校、家庭、地域の連携と学校教育の充実」「1-2-1 生涯学習への支援の充実」「1-3-1 芸術、文化の振興」「1-3-2 スポーツ・レクリエーションの振興」の4つです。具体的な施策としては、資料「第4次札幌市長期総合計画概要版」の8ページに「学校、家庭、地域の連携と学校教育の充実」「生涯学習への支援の充実」が、また10ページに「芸術、文化の振興」「スポーツ・レクリエーションの振興」についての方針、主な施策が掲載されています。

長期総合計画との関連については以上です。

資料3「『札幌新まちづくり計画』に関連する主な個別計画等」説明

事務局（企画部調整担当係長） 資料3をお開きください。これも大沼さんからの、新まちづくり計画に関連する主な個別計画にはどういったものがあるのかというリクエストに対し、事務局で整理をしたものです。がすでに作成されている計画です。が現在策定中、あるいはこれから策定する計画です。

高田委員 今日の北海道新聞に、札幌市が「子ども局」の新設について検討を始めたことが掲載されていました。また、厚生労働省の幼保一元化についても出ていましたが、これらについて計画はどう関連してくるのかが知りたい。

事務局（教育委員会総務課企画係長） 幼保一元化については、厚生労働省と文部科学省で協議をしている段階で、制度的な一元化というのはまだこれからの検討課題です。
事務局（調整課長） 子ども局については我々も今日の新聞で知ったような次第でして、内部的にはまだ検討中ということです。

白井会長 ほかにご質問は。

（「なし」と呼ぶ者あり）

資料4「ビジョン編構成イメージ」、資料5「基本目標と重点戦略課題」説明

事務局（企画部調整担当係長） 資料4、5は資料6の現状と課題を説明する前に全体をもう一度イメージしていただくためにつけています。資料4は前回もご説明したビジョン編の構成イメージです。5つの基本目標ごとに望ましい街の姿を描き、基本目標にぶらさがる形で17の重点戦略課題があります。17の重点戦略課題ごとに「(仮称)戦略目標」「現状と課題」「成果指標」「各主体の主な役割」「施策の基本方針」を形づくっていきます。本日はこの2番目の「現状と課題」を中心にご議論していただき、次回の分科会で「施策の基本方針」をご議論いただくことになっています。

資料5には5つの基本目標と17の重点戦略課題を掲載しています。この分科会でご議論いただくのは「芸術・文化、スポーツを発信する街さっぽろ」「ゆたかな心と創造性あふれる人を育む街さっぽろ」の2つの基本目標で、この下に「芸術・文化の薫る街の実現」「スポーツの魅力あふれる街の実現」「自立した市民に育てる教育の推進」「さっぽろを支え、発信する人づくり」の4つの重点戦略課題があります。この4つについて札幌市のプロジェクトチームで検討した「現状と課題」の概要が資料6です。

資料6「現状と課題」説明

事務局（企画部調整担当係長） まず「芸術・文化の薫る街の実現」では4つの項目を挙げてありますが、一番上は総括的な事柄を述べております。下の三つが項目立てで、1つが質の高い芸術・文化のこと、次が市民の文化活動に関すること、最後が伝統文化・文化遺産に関することです。

総括的な事柄としては、市民の関心は物の豊かさから心の豊かさへ向けられており、芸術・文化は都市としての魅力や個性を形づくる重要な要素の一つと認識されているということがあります。これを表すものとして、資料6右側のグラフがあります。これは総務省統計局が5年ごとに実施している社会生活基本調査の結果です。「学習・研究の種類別行動者率」は平たく言うと、自由時間等においてそれぞれの分野の学習研究活動を行った人の割合を示しています。注目していただきたいのが「芸術・文化活動」の部分が全国的にも札幌大都市圏においても著しく伸びていることです。これを地域づくり、まちづくりにつなげていくことが重要だと考えております。

質の高い芸術・文化の充実についての説明に移ります。札幌は芸術の森、K i t a r

a といったレベルの高い芸術・文化施設が充実しています。2 番目のグラフは過去 3 年間の主要な芸術・文化施設の利用状況の推移を示しています。年々順調に増えているという傾向を示しています。これらの施設を生かして優れた芸術・文化鑑賞の機会を充実するとともに、これからは札幌の芸術・文化振興の担い手を育成していくことが重要だと考えています。

高いレベルの芸術・文化が提供される一方で、市民レベルでの芸術・文化活動も盛んに行われています。これらの市民の主体的な活動を支援する仕組みづくりが必要だと考えています。下のグラフは、自由時間等に芸術・文化鑑賞を行った人の割合を示しています。札幌の特徴を挙げると「美術鑑賞」と「音楽会などによるクラシック音楽鑑賞」は全国よりも高水準で伸び率も高いという傾向を示しています。一方で「演芸・演劇・舞踊鑑賞」は全国よりも低い水準で伸び悩んでいる状況です。ちなみに K i t a r a は平成 9 年のオープンで、音楽鑑賞が伸びているはその影響が大きいと考えています。

次のページをお開きください。「スポーツの魅力あふれる街の実現」です。先ほど資料 3 でご紹介した個別計画に、今年 3 月に策定したばかりの「スポーツ振興計画」があります。この計画をベースに課題を要約したものです。コミュニティスポーツに関すること、ウインタースポーツに関すること、トップスポーツに関することの 3 本の柱を立てています。

コミュニティスポーツにつきましては、従来の純粋な競技種目中心から健康や生きがいづくりへと幅が広がっています。パークゴルフなどのニュースポーツに取り組む人が増えており、スポーツがより身近なものになってきていると認識しています。一方で「日頃の運動の割合」のグラフにあるように、運動をほとんどしていないという人が半数近くを占めている状況もあります。こうしたことから、生涯スポーツ、コミュニティスポーツの基盤となり、競技力の向上にもつながるような総合型地域スポーツクラブなどの仕組みづくりを進めていく必要があると考えています。総合型地域スポーツクラブというのは、ヨーロッパ諸国などに見られる、地域において子どもから高齢者まで様々なスポーツを愛好する人々が参加できる総合的なスポーツクラブを指しています。札幌では初の屋外系総合型地域スポーツクラブとして「スポーツクラブ札幌」、略称 S C S が平成 1 3 年に設立されています。これは藤野野外スポーツ交流施設を活動の中心としています。大沼さんがこの S C S の運営委員をされておりますので、お話をお聞きできるかと思えます。

ウインタースポーツにつきましては、子どものスポーツ活動の機会が減少し、体力や運動能力の低下が全国的に問題となっています。特に札幌の場合は冬のスポーツ活動が停滞傾向にあることが問題となっています。「戸外遊びの頻度」のグラフは、寒冷地技術シンポジウム 2 0 0 2 で発表されたデータで、戸外で 3 0 分以上遊ぶ日が週にどの程度あるかという質問に市内の小学生が答えたものです。平成 2 年から平成 1 4 年にかけて、夏、冬共に大きく減少している傾向が示されています。そこで、ウインタースポーツに

重点的に力を入れるとともに、健康づくりとスポーツ振興の連携を図っていくことが重要であると考えています。

トップスポーツにつきましては、スポーツの楽しみが、自ら実施するだけでなく、スポーツを観戦したりスポーツイベント運営を手伝うなど、スポーツへの関わり方に広がり生まれています。また、コンサドーレ札幌のように身近にプロスポーツがあることが、まちの誇りや元気の源となるなど、市民の大きな財産となっています。そこで、スポーツ振興の観点からも、地域密着のトップスポーツを活用したまちづくりを進める必要があると考えております。

次の資料をお開きください。基本目標「ゆたかな心と創造性あふれる人を育む街さっぽろ」の一つ目の重点戦略課題は「自立した市民に育てる教育の推進」です。「子どもたちをめぐる状況」では総括的なことを述べています。柱としては4つの項目を立てていまして「学校、家庭、地域社会及び行政の連携」「子どもの社会性と目的意識」「学ぶ意欲」「社会変化への対応」です。

「子どもたちをめぐる状況」は文部科学白書がベースになっています。現在の子どもたちは従来に比べて積極的な面を多く持っている一方で、社会性の不足や倫理観、規範意識が希薄になり学ぶことの目的意識や意欲が低下しています。従って、子どもたちの良い特性を一層伸ばすと共に社会の変化に対応できる教育に力を入れて、子どもたちの生きる力を育てることが大切であると考えています。

1つ目の柱立てとしては、社会の変化と共に親の過保護や無関心が広がり地域社会との交流による教育が十分でないことを踏まえて、学校、家庭、地域社会及び行政がそれぞれの役割を果たし十分な連携を図ることが必要であるとしています。「不登校児童生徒の出現率」のグラフを見ると、小学校での出現率は、札幌は全国に比べて若干低くなっていますが、緩やかな増加傾向を示しています。中学校の生徒については、札幌は全国と比較するとかなり低くなっていますが、同じような上昇傾向を示しています。ただ、平成13年から平成14年にかけては若干減少しているという明るさもあります。

「子どもの社会性と目的意識」では、少子化や核家族化による子ども同士の交流機会の減少などから、社会性が育くまれにくくなっていると認識しています。また、社会の転換期を迎えて夢や目標を築くことが難しくなっている。こういったことから、人と協調し、人を思いやる心や、夢や目標を設定し粘り強く取り組んでいくたくましい心身を育てていくことが求められていると考えています。

「学ぶ意欲」については、小学生から大学生まで学ぶ意欲の低下が見られます。「数学・理科が好きな中学2年生の割合」のグラフは、日本と国際平均を比較して表しています。日本の場合、学力は世界的にもトップレベルですが、学ぶ意欲は世界レベルよりも低くて低下傾向にあることがこのグラフに表れているかと思えます。従って、一人ひとりの個性や能力に応じた教育を行うことによって、学ぶ楽しさを実感できるようにすることが大切であると考えています。

「社会の変化への対応」については、国際化、情報化、科学技術の進展や環境問題など社会変化へのより一層的確な対応が必要と考えています。

次に「さっぽろを支え、発信する人づくり」ですが、こちらも一番上の項目が総括的なことを述べ、その下に4つの項目を立てています。「市民ニーズと学習環境」「NPOなどによる多様な公益活動」「高等教育機関における教育」「高等教育機関と地域社会」となっています。総括的な面については、社会の成熟化に伴い幅広い年齢層の市民が自己研鑽や社会貢献などの様々な目的を持って学習活動に取り組んでいて、市民ニーズに対応した学習機会の提供や成果を発揮できる環境づくりが必要であるとまとめています。

「市民ニーズと学習環境」では、個人の価値観やライフスタイルの多様化に伴い「学習や活動をしている分野」のグラフにあるように、平成2年から平成12年の10年間で様々な学習や活動に取り組む市民が増加しています。従って、これに対応した学習環境を整備し充実していくことが重要だと考えています。

「NPOなどによる多様な公益活動」については、「札幌市内のNPO法人数の推移」のグラフをご覧ください。ここ数年でNPOの自主的、公益的な活動が極めて活発化し、その活動分野もまちづくりを始め多様な分野に広がってきています。従って、今後はNPO等と連携した学習機会の提供やその成果を生かす環境づくりが必要であると考えています。

「高等教育機関における教育」に関しては、「大学・短大入学定員」のグラフをご覧ください。札幌と全道、札幌を除く全道の人口1万人当たりの大学・短大の入学定員数を比較したものです。札幌は全道と比較して入学定員数が多く、札幌圏には多くの高等教育機関が集積していることが分かります。その本来の教育・研究機能により優秀な人材を生み出すとともに、魅力ある学校づくりと多様な学習機会を提供することが必要であると考えています。

「高等教育機関と地域社会」については、高度で専門的な教育を行うための人材や施設を生かした社会人のリカレント教育などの地域貢献や大学間ネットワークづくりが必要であると考えています。

以上で説明を終わらせていただきます。

資料に関する質疑応答

白井会長 4つの重点戦略課題に則して、現状と課題についてデータを交えながらご説明いただきました。現状を認識しておく必要があるということでデータを提供していただいたわけですが、このデータを最低限押さえておきながら議論を進めていきたいと思えます。

説明に対して質問がありましたら、お受けしたいと思います。

大沼委員 「生涯学習に関する市民アンケート調査結果」のグラフについて、これは平成2年と平成12年の傾向は一緒と考えてもよろしいですか。平成12年の結果は複数

回答になっていると思いますが。

事務局（生涯学習推進課推進係長） 平成2年も12年も複数回答です。全体的に各分野で活動している方が多くなっているということです。「スポーツや体育」「趣味、芸術、技芸」に関する学習、活動が大きいという傾向は変わっていません。相対的に学ぶ人が底上げされてきている状況をこのデータは示していると考えています。

大沼委員 分かりました。

白井会長 他に何かお気づきの点は。

木路委員 「大学・短大入学定員」のグラフに専門学校・専修学校が入っていないのには何か理由があるのでしょうか。ご存知かとは思いますが、専門学校・専修学校の学生数は短大をはるかに上回っています。就職難から大学を卒業して専門学校に入るという現象もあります。

事務局（教育委員会総務課企画係長） 専門学校・専修学校を意図的に除いたわけではありません。このデータは、教育を受ける機会が札幌には多くあり、その結果、学生が多く札幌に集まっている、そういったことを示すために出しました。

木路委員 就職状況と関連して、単純な問題として扱えない部分が専門学校にはある。これは社会的に認知し考えないといけません。短大よりも学生数が多いということをご存知でしょうか。

事務局（教育委員会総務課企画係長） これは札幌には学習機会が多いという例として出したものですので、専修学校・専門学校の存在を無視したという意図ではありません。ご理解いただきたいと思います。

木路委員 何となく分かったような気持ちです。

高田委員 市民アンケート結果の7ページにある「ゆたかな心と創造性あふれる人を育む街さっぽろ」の回答で最も多いのは「思いやりとゆたかな心を育む教育」ということですが、一番大事なことだと思います。70歳以上の方は2番目に「家庭の教育力の向上」を挙げておられますが、数字としては小さいかもしれませんが、とても大切なことだと思いますので、力を入れていくべきだと思います。

白井会長 これは後程、具体的なご意見を議論の中で深めていきたいと思います。

ご説明いただいたデータについてのご意見をいただきたいと思います。他にいかがでしょうか。

（「なし」と呼ぶ者あり）

（４）意見交換

事務局からの回答と自己紹介

白井会長 4つの「基本目標」に関する「現状と課題」についてご説明いただきました。皆さんが考えている「現状と課題」とずれもあるかと思います。また、札幌市がどういう政策を考えているかを知るのも大事ではありますが、あまり知りすぎると我々は何も

言えなくなるということもありますので、最低限の部分を押さえながら議論をしていきたいと思えます。

全体会議でも自己紹介をされたかと思いますが、ここではやや長めに、今はどのようなことをしてどんなことに関心があるのかということを含め、簡単に自己紹介をしていただきたいと思います。

事務局（企画部調整担当係長） その前に、前回中島さんから出されたご質問に対する回答をさせていただきますでしょうか。

前回、中島さんから2点ほどご質問をいただきました。一つは、行政が映画に投資をして儲けるようなことができないのか。もう一つは、行政が投資なり補助をした映画によって得た収入の受け皿となるようなものが考えられないかということでした。

1点目につきましては、その場で「理論的にはできる」とご回答申し上げましたが、さらに調べました。地方公共団体が一般劇場公開用の映画製作に携わることは、すでに群馬県や愛媛県の先行事例もありまして、制度上の問題はないと考えられます。ただ、地方公共団体はご存知のとおり営利を目的とした団体ではないので、純粋に儲けを目的として製作することは困難です。従って、地域振興とか地域の文化の発信といった公益性が求められるものと考えられます。

群馬県の例におきましては、県の人口が200万人を突破した記念碑として作られたというふうに聞いております。愛媛県におきましては「えひめ映画」というブランドで売り出していますが、愛媛文化を全国に紹介することを目的として製作されたものということです。

また、群馬県の事例においては、県を含む製作委員会を設立しまして、そこに県が補助金を支出して映画製作を行い、映画から得られる興行収入はいったん製作委員会に収入された後に県の方に収入されていると聞いております。

従いまして、何らかの公益的な理由から自治体が映画を製作し、あるいは映画製作に補助を行ってその収入を自治体が収入することについては、先例もあり可能だと思います。

白井会長 中島さんいかがでしょうか。

中島委員 調べていただいてありがとうございます。私は、行政は商売をしたらいけないのかなという単純な気持ちで質問してみました。公益性がどういうものなのかというのは文化において一番難しい問題なのですが、黒字であるとか赤字であるとかということではないわけです。原則的には公益性があるかどうかというのは市民が判断すべきものだと思います。

映画で言うと、商業映画のような一般劇場で公開されるような大きなものは、普通、皆が享受できますので行政がカバーする必要は全くないと思えます。ところが、露出が少なくて享受できないような文化があります。原則的には、そういう享受しにくいもの、少数のものをカバーしていくことが文化の成熟ではないかと思えます。文化の公共性と

というのは大多数のためにあるのではなく逆に少数のためにあるという言葉を出しておきたい。優秀な作品だけでも商業性が少ないものを何らかの形で支援していく、その際に黒字になってもいいのではないかという発想です。

私が提出した資料(「考察 フィルムコミッションの力」(「観光会議ほっかいどう」10号16頁から21頁))の17ページの最後に、フィルムコミッションがなぜ全国で作られているのかが書かれています。「スタッフさえいれば、つまり人件費以外あまりお金をかけなくてもいろいろな効果を期待できる」ということが大きい。過大な設備投資等がほとんど必要なく、様々な文化的、経済的効果が得られる可能性が高いので、全国の自治体が競ってやっているというのが現状です。

また、資料の20ページ「フィルムツーリズム振興の期待を過大視せずに活動を」の後半に、タイアップということでFCや自治体にお金を出させようとする悪質な製作者がたくさん出てきているが、それに乗ってはいけないということが書いてあります。

私が言っているのは、積極的に製作に関わる、あるいは出資するのであれば、札幌の映像関係者を雇用する、ロケをすべて札幌でやることにするというように、お金を地元で落としてもらおうようなシステムを作るということで、そういった例はかなりあります。そういうことを積極的にできないものかと思います。

また、21ページに文化財の問題が掲載されています。「新しいものと古いものが同居できる街づくりを」と第1回全体会議で言いましたが、古いものをできるだけ残すということがフィルムコミッションにとっては非常に重要です。しかし、これはフィルムコミッションだけでは成立しません。行政、民間が一緒になって良いものをできるだけ残していくことが映像製作のためにも魅力あるまちにつながります。

文化財についている看板を外せないという問題もあります。それが写ってしまうとリアリティも何もない。もう少しフレキシブルな対応はできないのかという観点があります。

フィルムコミッションの最大の効果とは、地域の人たちがまちを自分たちのまち、誇りあるものとして考えられることにつながっていくことだと思っています。町内会の人たちが自分たちのまちを「こんなところが素敵だな。こんなところがもしかしたら映画の材料になるかもしれないな」というような学びに結びつく可能性がある。抽象的に考えるのではなく、映画にするのであればこうなるだろうと具体的に考える材料になるのではないかと思います。自分たちのまちの文化的な再発見につながる可能性が非常に高いのです。お金もそれほどかかるわけではないので、フィルムコミッションをまちづくり活動の1つとして、ビジョンとして出していただければという提案です。経済的な効果については、経済・雇用の分科会で提案したいと思います。

また、フィルムコミッションとからめて公共施設の全面的開放について考えていただきたいと思っています。その1つの例として、東札幌のICC(札幌市デジタル創造プラザ)を実験的に24時間開放しているということをも2、3日前に聞きましたが、すごい

ことをやっているなと思いました。一番の問題は管理だと思います。今日の会議を市役所ではなくこちらで行うのは管理の問題があったためだとお聞きしました。映画の撮影は夜間にあったりします。そういうものを含めて公共施設の24時間開放ができる可能性を作れると市民の使い勝手がすごく良くなると考えます。

それから昔、創成小学校で成人学校というのをやっていたと記憶していますが、大人が夜学べる場所、そういった形での開放も大切なのではないかと思います。

昨日、月寒小学校の子どもたちに映画館を体験してもらって体験学習を行いました。そのように、民間と行政の教育者が色々な形で交流、連携し、映画や文化を子どもたちが体験できるような形をビジョンとして出していきたいと思います。

白井会長 ありがとうございます。実際、文化の問題と経済の問題というのは切り離せないことをごさいますて、その辺をご自分のお仕事の観点からお話いただきました。

それでは、中島さんの次、木路さんから時計回りで自己紹介をお願いいたします。

木路委員 自分は今、道立近代美術館協議会、北海道日米文化交流協議会、ほかにもいくつかの団体に関係しております。

文化と教育に関して若干かかわりをもっているのですが、これまでいろいろな提言をコラムニストとして出させていただきました。今回、この会に参加させていただいたのはコラムニストというだけではだめだ、実際につくる側にまわってはどうかと勧められ、何気なく応募したところ選ばれたというわけです。

一つ問題は、前回の全体会議でもお話ししましたが、この会がどういう具合で進んでいくのかが分からないということです。データに基づいているいろいろなことを詰めていくということになりますと、市役所の専門スタッフの方々にはかなわないわけです。ですから、われわれ市民が参加するということはひょうたんから駒的な部分を期待しているのかなと思うわけです。

中島さんが言われるように、そんなに金がかからないということになると、それはいいなことになるわけですが、それだけでは長期的な展望、ビジョンはできません。前回もお話ししましたが、文化とか教育はお金がかかるものです。それをどの辺までかけていいのかということが皆目検討がつかない。前回の全体会議では市から財政状況が出されましたが、あれを見るとまったくわれわれが何を言ってもだめだなと暗い気持ちになってしまうわけです。

我々が議論をした中から面白そうだというものを取り上げて、市長がそれに優先順位をつけていくのか、また、我々は思いつきをばらばらと並べていいのか、どういうスタンスで提言すればいいのか、その辺がちょっと分からないことです。

ここにお配りしたプリントは、私が常々危惧していることを話題提供ということで出させていただいたものです。これをやっていただかなくてはならないということではなくて、分科会でスタッフそれぞれが持っているこのような問題点を出し合って討論しあい、分科会としての優先順位をつけて全体会議に持っていく。そういうことかなと思ひ、

出したものです。

白井会長 今回は初めての分科会ということもありますし、進め方というところも議論をしながら決めていきたいと思います。

行政は決まった予算をどう施策に反映していくかということになりますけれども、今回われわれはそこから離れて、ひょうたんから駒的発想で考えるというのがこの分科会の役割だと個人的には思っております。

木路さんにはまた後で資料の趣旨説明をお願いいたします。

それでは杉森さん、お願いいたします。

杉森委員 杉森といいます。「札幌VO」というNPO法人をやっております。主に不登校児童支援のためのフリースクールを運営しております。

いただいた資料には「次代を担う子どもが生きいきと育つ環境づくり」ですとかすばらしい言葉がたくさん並んでいるのですが、実際に子どもたちを見ているとそれは雲の上のことではなかなか遠いな、子どものことが見えているのかなと強く感じます。例えば、札幌はKitaraなど芸術・文化面が充実していると言いますが、子どもたちをそこに連れて行くのはものすごく大変なことです。目を向かせることはすごく大変なのです。また、スポーツをしようといってスポーツをするまでには長い時間がかかります。

この間も札幌市教委の方が来ました。多分、文部科学省からSSN(スクーリングサポートネットワーク事業)調査の命が下ったのでしょうが、ほんの10分くらいで形だけでした。以前、私は道教委から委託を受けスクールサポートプログラムという事業に3、4年関わったことがあります。市教委にもネットワークづくりということでお話しに行きましたが、けんもほろろに追い返されました。ですから、今さら何だという気持ちもすごくありました。

今日の資料には「学校はすごく充実している」という部分がありましたが、果たして本当なのかなと思います。こういう子どもたちを見ないで本当に札幌市のまちは良くなるのかな、いいまちづくり、人づくり、文化と言いますが、本当なんだろうかとも思います。

本当に子どもたちが生き生きと元気になるようにしないと、真の意味での人づくりやまちづくりはできないと私は思いました。いいところをどんどん上げることは意外に簡単なのです。でも、底辺を上げるのはスポーツでも子どもたちの現場でもものすごく大変なことなんですね。ですから、そこをもう少しきちんと見ていただきたいなと思います。

そういう疑問を常々もってこの市民会議にも参加させてもらっています。私は子どもたちのことを考えながら意見を出させていたきたいと思っています。

白井会長 ありがとうございました。

私は白井と申します。大学で発達心理学を研究しております。簡単に申しますと、子

どもから高齢に至るまでの生涯発達に関する心理学です。もう少し具体的にキーワードで申しますと、関心をもっているのは、子ども、学校、文化というような問題です。

それでは阿部さん、お願いします。

阿部委員 私は東区の伏古で整骨院をやっております。

私は祖母がアイヌ民族で私自身もアイヌ民族です。この大都市においてもいまだにアイヌ民族の差別がたくさんあります。関東から西では部落開放同盟の運動が非常に活発で、人権に関する集会など人権教育の機会がたくさんあるのですけれども、この北海道ではどういうわけかまったくそういった機会がありません。

また、アイヌはすでに滅びていないというようなことが言われております。アイヌ語はしゃべれないし、もうアイヌはいないんだという学者先生もたくさんいるわけです。それにどんなものを見ても130年前、明治維新からこちらしか書かれていない。すべてが開拓史観なんですね。それまでは人がいなかったみたいです。それがいまだに続いているということは、人間としていけないことだと私は思います。何万年も前から北海道に人が住んでいたという歴史を抹殺してはいけません。それをいろいろなところで子どもたちにお話ししますが、みんな話を聞いてびっくりします。そんなことは習ったこともないし聞いたこともないと。

1997年に「アイヌ文化振興法」という法律(アイヌ文化の振興並びにアイヌへの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律)が成立しました。そして「アイヌの人々の民族としての誇りが尊重される社会の実現を図る」ということで、内閣総理大臣が基本方針を立てて、北海道知事が基本計画を立てたのです。しかし、毎年財団で副読本を作って、小学校4年生、中学校2年生全員にと言って学校に配るのですが、実際に学校に行くと配られていないのです。今日も清田の学校に行ったのですが、全部倉庫にストックされているということが分かりました。

そういうことで、私は自分の命、人生をかけて、アイヌの差別撤廃と権利回復のために運動をしております。よろしく願いいたします。

白井会長 ありがとうございます。それでは飯塚さん。

飯塚委員 飯塚優子と申します。西区の八軒で15坪ほどの小さなスペースを個人で運営しており、そこを使って文化や地域に関わる活動をしております。

私は演劇のマネージメントやプロデュース、あるいは環境整備の仕事を20数年しております。演劇は芸術作品として作り上げていくという方向と同時に、地域の教育、福祉などのさまざまな問題解決のために使えるということがあります。こういった演劇の生かし方がようやく日本でも導入されてきていまして、そのための活動を八軒の小さなスペース、あるいは地域を基にして続けております。

その中で障害になっていること、あるいはぜひこうしてほしいと感じたことを今回お話しさせていただきたいと思っております。

先ほどご説明いただいた資料に「学ぶ意欲」や「思いやり」「たくましい心」「生きる

力」などの言葉がありました。そのために演劇が非常に役に立つ、できることがあると確信しており、生かしていきたいと思っています。

それから、行政や様々な組織がそれぞれに良かれと思ってやっていることがうまくつながらないところに非常にもどかしいものを日ごろ感じております。例えば、教育に関するアンケートがありました。この中に当然入っていていいと思う教員の職場環境の整備、教員の資質の向上に関する項目が入っていません。また、様々な調査結果が載っておりますけれども、教員の職場環境や資質に関する調査結果がここにはないのはどういうことなのでしょう。これらに象徴されるように、さまざまな動きがきちんと集まってきました。

そういったことについてお話しさせていただきたいと思います。

白井会長 では大沼さん。

大沼委員 大沼と申します。大学ではスポーツ社会学を研究しております。地域社会とスポーツの関係ということを専門に仕事をしています。札幌市では「スポーツ振興審議会」という法律で規定されている委員会の専門委員会にてアンケートや作業をさせていただいた経験があります。

先ほど、杉森さんがおっしゃったような部分、子どもたちの日常というのはアンケートから透けて見えてくるんですね。僕は、学校が終わったら何をしているかという質問項目を立てました。4,000くらいのデータが集まったのですが、小学校の2年生くらいまでは夏休みと冬休みにはそれぞれ水泳とスキーに行くという子が結構多くて、小学校の6年くらいまでだと塾や少年団、お稽古事に行っているという子が5割くらいです。それが中学2年生になると塾に行っているというのが一気に増えて8割を超えているんですね。その中で部活もやり他のこともやっています。この裏側には親がいてそうさせているわけですが、家庭環境はどうなっているのでしょうか。

資料には総合型地域スポーツクラブとは「地域において、子どもから高齢者まで様々なスポーツを愛好する人々が参加できる」とあるのですが、そんなことができるんだろうかと思いました。誰が指導できるのでしょうか。また、スポーツをすることが困難な方たちはどうやってアクセスできるようにすればいいのだろうかと考えてしまいました。

面白い調査結果もあって、札幌市の部活動をする中学生や小学生の率というのはものすごく高いんですね。地方に行けば部活が成立しないくらいの中学校があります。野球部があるところはいい方で、個人スポーツしかできないというまちが北海道の地方には多い。そういう現状がある中で札幌は恵まれており、また、施設にも恵まれているのですが、その質はどうなっているのでしょうか。

皆さんからもご指摘がありました。特に学校がブラックボックスになっていて実態がよく分かりません。資料でも学校に関する提言のところは文部科学省の白書が大体そのまま載っています。どこに課題があるのか確定できない中でやるのは結構苦しいものです。スポーツの分野から見ると、部活にしる、総合型スポーツクラブにしる、学校が

終わった後の子どもたちの動きということになるので、環境づくりには学校との関係が大事になるという気がします。

私はカヌーを大分前に始めたのですが、カヌーは自分で作りました。阿部さんのお話ではないですが、カヌーで川を下ると、道路がないずっと昔からアイヌの方が川を移動のために使っていたということがよく分かるのです。文献にも載っていますが、日高から朱鞠内までカヌーで漁に行ったという、今考えたらとんでもない世界ですが、そういったことがだんだん分かっていきます。

また、こんな体育の授業ができるというのは大学だけなんです、学生に自分たちでカヌーを作らせて石狩川を下るということをやるんですね。すると、自然との関わり方を知らない学生がすごく多いということが分かります。資料には非常に美しい言葉が並んでおり口当たりはいいのですが、それではどうしていったらいいのかというアイデアを出さなければいけないのではないかなと思います。例えば、自然と触れ合うといっても触れ合い方が分からないですし、中島さんが言われましたが、映画館で体験学習といっても、多分、映画館に行くだけでは面白くないので、プロの目でこんなところが面白いんだよと教えてやる。そういう知恵を出し合っていければいいのではないかなと思います。

白井会長 それでは高田さん、お願いします。

高田委員 高田でございます。

私は今日「風の舞」というハンセン病の映画を見てきたのです。エルブラザであったんですけども、入りきれないくらいの人でした。中島さんがおっしゃる観点とは少し違うかもしれませんが、本当にいいものを作れば、宣伝によってはお客様が啓蒙される部分というのはすごくあるんじゃないかなと思います。

それから、先ほど飯塚さんがおっしゃっておられた演劇の問題ですが、これは場所、お稽古場がないという問題があるのではと思いました。それから、写真ライブラリー、市民ギャラリーの利用が少々少ないようですけども、これは人との交流の楽しみがないからだろうと私は思いました。

実は私は市民会議に応募するためのレポートを「環境と人づくり」をテーマに出しました。以前マンションの10階でEM菌で生ゴミのリサイクルをし、キュウリ、トマトを栽培したところ大変大きくなった喜びが環境へのプロローグでした。

私は、母子家庭の団体に14年ほど関係し、また、家裁の仕事、人権擁護委員といった相談的なこともやった経験がございますので「人づくり」についてもレポートで取り上げた次第です。ですけど、経済・雇用の分科会に関わることになりました。雇用ということでは、去年の11月から3月までキャリアコンサルタントの講座を受けるなど、職業相談事業に関係してまいりました。

今日直接私が感じたことで、家庭の教育力が相当に落ちているということです。地下鉄の中で3、4年生の男の子が入り口のところにべたべたと座っているんですね。思

い切って「こっちへお座り」といって席を譲ってあげたのですけれども、どうも落ち着かない様子なんですね。

なお、厚生労働省のモニターをしているのですが、「エイズに警鐘を」というレポートを、また、9月にはリビングウィル、尊厳死の法制化についてのレポートなどなどさまざまな問題について提出しております。こういう見えない部分の問題にも丁寧にやっていかなければならないんじゃないかと思います。それはまさしく学校教育、家庭教育、社会教育という生涯教育の一環だろうと思っております。

そういったことに関心を持ちながらおります。

白井会長 ありがとうございます。

最後の尊厳死の問題ですが、最近の教育のテーマに生きる力をどう育てるかということがありますが、逆に死について正面からなかなか取り組むことが少ないということがあります。この会議でそういう形での議論が出るかもしれませんが、そのときはよろしく願いいたします。

それぞれ自己紹介をいただきながらということでしたが、何かもう半分くらい討論に入っているような形で、共通した話題もありましたし、独自のところもありました。それぞれの方の背景を少し知ることができたので、議論でも指名させていただくことができるかなと思っております。

それでは「現状と課題」ということで、メモを出してくださった方々に趣旨を簡単にご説明いただきながら、さらに議論を続けていきたいと思っております。

どうでしょうか、ちょっと休憩を入れてからお話いただく方がよろしいでしょうか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

白井会長 それでは、10分ほど休憩を入れます。

(休憩)

委員提言の趣旨説明

白井会長 それでは再開させていただきます。

それでは資料7に綴じている順に発表をお願いします。

木路さん、先ほど資料の公開について事務局から話がありました。この資料は公開してもよろしいでしょうか。

木路委員 構いません。

白井会長 それでは趣旨説明をお願いいたします。

木路委員 話題提供ということで箇条書きに並べてきたわけですが、2ページ目の「【教育】人づくりサポート」から説明していきたいと思っております。

先ほど、K i t a r aに子どもを連れて行きたいんだけど、というお話がありましたが、それとの絡みでカルチャー・スクールバスの設置があります。これは私が道関係の委員会で出したテーマです。

ルーブルやメトロポリタン美術館などでは、若い先生が幼稚園や小学校低学年の子どもたちを車座に座らせてお話をしている姿をよく見かけますが、そういう状況は日本ではほとんど見られない。そういったことが先ほどの委員会で指摘されました。学校の先生が美術館なり博物館に連れて行きたいなと思っても、危険性や交通費、いろんなことがネックになりなかなか気軽に連れて行くことができません。

私はルーブル美術館で女性の若い先生に「よく連れてきましたね」と聞いたのですが、一人で連れてきたということでした。「スクールバスで送迎してくれるから大丈夫」と言うのです。それはすごいなと思いました。

また、そのときは「ファッションデザインの歴史」というような非常に難しい美術展でした。そんなものを幼稚園の子どもに見せて説明しても理解できないだろうにさすがパリだなと感心していたのですが、実は違うところにねらいがあったんですね。どういうことかと言いますと、ある程度時間がたち子どもたちがおしっこがしたいと言い出したのです。それで20人くらいの子もたちを先生がトイレに連れて行ったのですが、そうすると子どもたちが女性トイレの前にずらーっと並んだのです。トイレには私の家内もいて見ていたのですが、後から来たお客さんはどこにも入ることができません。そうしましたら、その若い先生が「他の人も使うんだから、あなたたちはこの二つに並びなさい」と並ばせたのです。つまり、美術館の中で社会教育をしているのです。

これはすごく効果があると僕は思いました。教室の中で、みんなで便器を譲り合いましょうねと言ってもなかなかぴんとこないでしょう。だけれども、そういうシチュエーションの中ではああ、そうかと具体的に分かるわけですね。社会に子どもたちをどんどん出していきこういうシチュエーションを作った方が豊かな人間性のある人材を育成できるんじゃないかと思うのです。意欲のある先生方と意欲のない先生方がいて差がつくなど、問題点は確かにたくさんありますが。

実は、すでにこれは動き出しています。このことについてお話をしたときに、たまたまJRバスの会長がおりまして、当時の道教委の教育長と3人で話をしたところ、JRがバスを提供しテストケースとして学校に配置してみようということになったのです。

これはおそらく札幌市議会である議員からすでに質問があったと思います。一校が一台のバスを持つのは大変なので、札幌に100台なら100台のバスを使えるような仕組みをつくり、それを各校に割り当てるようにすれば可能だろうということで進んでおります。

(このあと木路委員が体調を崩される。)

白井会長 この後の討論はいかがいたしましょうか。時間まで継続する方がよろしいでしょうか。

事務局(企画部長) 次回ということではいかがでしょうか。

各委員 このまま続けるのもどうかと……。

白井会長 そうしましたら、今日は中断ということにしたいと思います。次回は今日のまとめを冒頭にさせていただいた後、残るお二方の発表をいただくという形にしたいと思います。

(5) 次回の日程調整

次回は、12月25日といたします。

4 閉 会

白井会長 木路さんの一刻も早い回復をお祈りしつつ、今日の会はこれで終了させていただきます。どうぞご協力ありがとうございました。